Hack For Japan + Code for Japan

あなたのスキルは社会に役立つ

2011年3月11日の東日本大震災発生の直後に発足したHack For Japanと「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げる Code for Japanのメンバーから、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアができる社会貢献」をテーマにした記事をお届けします。

第85回

台湾のシビックテック、gOv summitに参加して

● Code for Japan 武貞 真未(たけさだまみ) (Witter @mamisada

台湾版シビックテックgOv

Ask not why nobody is doing this. You are the "nobody"!^{注1}を合言葉に、シビックテックを行っている台湾の団体がg0v^{注2}です。情報の透明性とIT技術を用いて、市民主導の活動を行っています。

サミット参加のきっかけ

Code for Japan代表の関さんがg0vと交流があり、隔月開催している「ソーシャルハックデー」の冒頭で上記内容の紹介があり、初めてg0vについて知りました(写真1)。

回を重ねるごとに、そのタグラインが気になっていましたが、実費を出して10月に台湾まで行かなくても、その前月に新潟で開催されるCode for Japan SummitでgOvのセッションに参加すればい

▼ 写真 1 g0v summit スタッフ集合写真



いかなと思っていました。

そんな中、gOvのメンバーのLisaさんがオンラインでCode forのメンバー向けに説明してくれる機会があり、日本語で丁寧に話す彼女の熱意を感じ、関心がより高まっていきました。

新潟サミットで刺さった熱量

スタッフとして参加したCode for Japan Summit は、全国各地のCode forから集まったメンバーだけでなく、関わってきた自治体・企業から大勢来場されていて、あらためてシビックテックの熱を感じる場所だったのですが、その中でもgOvメンバーのセッションはとくに学びの多いものでした。

彼らのシビックテックは、ひまわり学生運動^{注3}が起点となっており、この活動によって政治と市民との間の情報の透明性を確保し、市民の発言・提案・行動の促進をしてきた実績もあることから、現在は政府と連携した形で市民が政治に参加しやすいしくみを作っている、という内容が発表されました。

若手や女性の活躍する組織

彼らの話す内容もさることながら、その内容を 発表していたのが、オンラインで日本語でg0v summitのことを話してくれていたLisaさんで、実

- 注1 「誰もやらないのなら、まずは自分からその『誰か』になれ」という、オーナーシップを駆り立てるタグライン。gOvのメンバーは「nobody」と書かれたTシャツを着ていたりします。
- 注2 最初は「ゴブ」「ガブ」なんと読むのかよくわからなかったのですが、正しくは「ガブゼロ」と読みます。
- 注3 台湾の学生と市民らが2014年3月18日に立法院を占拠したことから始まった、一連の社会運動。

台湾のシビックテック、g0v summit に参加して

際に対面してみると若くて元気な女性だったことも また興味を引くポイントでした(**写真2**)。

日本のシビックテックは中堅~ベテランの方が多く、大手企業から独立して自営業へというキャリアの人が多い印象です。20代の女性はほとんど見かけないという状況だったので、台湾のシビックテックは全体の雰囲気から違うのではないかと感じるものがありました。

gOv参加の気運が高まる中、最終的に踏み切れたのは良くも悪くも日本人的な「みんなが行くなら行ってみようかな」でした。Code for Japanの代表でもある関さんを筆頭に、各地のメンバーにも新潟でのサミット期間中「決めた。行く」と言っている人がいたので、そのままその場で「私も行く」と口を滑らせたのが決定打でした。

暖かい人と街 we.hack();

実際に台湾に訪れてみて思ったのは、想像以上に外国感がないということでした。距離としても沖縄に行くのと変わらない近さですし、漢字で書かれている看板やメニューは読めなくともなんとなく何のことかはわかりますし、何より日本語表記もしてくれているお店が多いので困ることはあまりありません。移動も悠遊カード(Suicaのようなカード)を買ってMRTやバスに乗れば簡単に目的地までたどり着くことができました。そして何かに困っても、カタコト英語で質問したらみんな丁寧に対応してくれました。

ホスピタリティ満載のgOv summit

サミットは台北のSinica(中央研究院)という研究施設で開催されたのですが、チケットがアプリでペーパレスであることはもちろん、メイン会場だけでない小さな会場でのセッションを含めてほとんどすべてのセッションが同時通訳つきで、Web 経由の中継で英語・中国語両方で聞くことができました。

▼写真2 Code for Japan SummitでのLisaさんの講演



さらにWi-Fi環境も完備し、食べ物飲み物も充実 していました。

参加者サポートツールはリアルタイムに共同編集ができるMarkdownエディタの「HackMD」、音声認識でのリアルタイム文字化と自動翻訳ができる「UDトーク」、質問を投票型で優先度を付けながらみんなで出せる「Sli.do」などがあり、ノートを取らずとも、また中国語・英語がわからずともセッションに参加できる環境がありました。参加したセッションのうち、いくつかを紹介します。



Decolonising the Internet: possibilities for Asia and beyond

インドにルーツがあり、現在はニューヨークで暮らすAnasuya Sengupta さんのキーノートはアジア人・女性というマイノリティがインターネット上で持ち得る可能性について話してくれました。

全人類の半分以上がオンラインにいて、3/4以上は南半球(アジア・太平洋・アフリカ・ラテンアメリカ・カリブ・中東)からで、半分は女性であり、アジアにおいても4割は広帯域のインターネットに接続できていて、ハード・ソフト両方のイノベーションは起き、ニュースサイトやコミュニケーションツールが増えている。にもかかわらず、インターネット上の情報の大半はいまだ男性かつ北半球が大半を占めていて、南半球の情報はほとんどが口頭で飛び交うだけでインターネット上に載せられていない²⁴。だからこそ、アジア圏や女性が発信する情報をインターネット上に載せていくことで、本当に対等でフラットな社会にしていこうという話があり

注4 全世界的な集合知としてのWikipediaを見てみると、男性以外の性別の人は1割程度しかおらず、南側から出ている情報は2割程度にとどまる。



あなたのスキルは社会に役立つ



ました(写真3)。

また、彼女が最後に事例として取り上げていたのがGrace Banuさんという最初の「性転換をして女性になったエンジニア」としてWikipediaに載った人でした。

そもそもWikipediaに掲載されている人のほとんどが男性で、比率として女性やそれ以外の性の人はとても少ないので、彼女だけでなく、もっと多くの男性以外の性別の人たちの情報をインターネット上に届けて、みんなと一緒に社会を変えていきたい。という提案があり、今からでも少しずつでもみんなができるアプローチでもあり、その集合が力になるイメージもある素敵な取り組みだな、と強く印象に残りました。



Imagining a digital nation

台湾の英雄、Audrey Tang さんは、g0vの構築にも参画し、オンラインで討論ができるvTaiwanの立ち上げにも貢献しているシビックテッカーであるだけでなく、2016年よりデジタル大臣として台湾政府に入閣してもいる稀有な存在です。中学を中退し自学と仕事をするようになり、AppleやBenQなどの顧問を務めていて、「インターネットの神童」「パソコンの天才」と呼ばれていた人でもあります。

自分の役割は「市民とともに市民のためのソーシャルイノベーションを起こすこと」と掲げるAudreyさんは、前時代的な主導権の握り合いをする政治ではなく、さまざまな角度から関わる人によってコラボレーションを起こすものに変えていきたいと考え、それを実行しています。

「サンドボックス」というWeb上の提案の実行化を促進する場所を作って、提案があったらポスト

▼写真3 いかにアジア圏・女性の発言がインターネット上 で足りないかを示した Anasuya さんのスライド



し、賛同する人がいればプロボノが協力したりしながらやっていくというプラットフォームを作ったり、「vTaiwan」という政策提言に対しての賛否を募ることで、自分の周りの人がどんな意見を持っているのか可視化したり共感を持てたり議論のきっかけになる場を設けたりしながら、透明性を保ちつつ市民参加を促していました。

また、都市部の台北に住んでいる人は話に行けるけど、それ以外の地方に住んでいる人にはどうリーチするのかという疑問に対しては、地方に自分が行ったときに現地の人たちと話してライブチャットを実施するようにしたところ、そこから派生して、最初は1on1での対話だったが、相談がほかにおよぶ内に今では12すべての省庁が話す場所になっていたりと政府の内部への促進も担っており、短い期間であらゆる角度から共創を生み出していることが感じられました。



ワークショップ [Code for Gender]

聞いてばかりのセッションも勿体ないので、参加型のセッションもチャレンジしてみようと選んだのがジェンダーに関するアイデアソンのセッションでした。近くに座っている3人でチームになって自分の課題・共通項・どんなアプローチで解決するかを話すという短めのワークだったのですが、筆者が座った席の周りにいたのが、台湾の大学教授と中国からこのサミットのために初めて台湾にきたという学生さんで、図らずとも台湾×中国×日本というコラボレーションになりました(写真4)。

大学教授の課題は「高等教育における女性の少なさに対してどれくらいサポートすることが平等になるのか」、中国からの彼女は「専門家が作った真面目な性教育コンテンツが誤解されてアダルト指定でブロックされてしまうのを、子どもたちにキチンと届けるためにはどうしたらいいか」でした。3人で話し合った結果、早期介入として小さいころからの正しい情報を届けることが必要だから、「アニメや映画、ドラマなど多くの人の目に触れる動画コンテンツの中からジェンダーバイアスを減らしていくことやLGBTQのキャラクターが自然に配置されているこ

台湾のシビックテック、g0v summit に参加して

とを促せたらいいのではないか?」という解決策に 至りました。

筆者は中国語がしゃべれず、学生の彼女は英語が 使えなかったので、台湾の大学教授を通訳に挟みな がらの会話でしたが、みんな話したいことと思い入 れがあるので障壁に感じず、絵を描いたり漢字で書 き出して伝えたりしながら終始盛り上がりました。

サミット3日間を通して。 感じたこと

若手が多い! 女性も多い! そして元気! という台湾のg0vチームの多様性と熱量に驚いたことが一番のインパクトでしたが、インド・中国・台湾・ミャンマーからの登壇者の話を聞いて、日本が抱えている課題とアジア圏で起きていることは私たちが想像している以上に近いのではないか? という仮説を持ち帰ることができたことが大きな収穫でもありました。

日本で地域や国内の課題を解決しながら、そのスキームやアプローチをしっかりとアジア圏内のシビックテック仲間と共有していけば、それが他国にも役立ったりするかもしれないと思うと、より今やっていることの意義が感じられ、エネルギーも増す気がしました。

帰国後の日本メンバーhack()

Code for Japanのオフィスで報告会をしたのですが、その後の活動に一番大きな変化が生まれているのは、Code for Youth (若手のチーム) でした。彼らは帰国後すぐに企画を立ち上げ、「Civic-Tech Global Relationship」と題して、オンラインで定期的に国内外の事例を調べたり実際自分が見聞きしたことを共有したりしています。

台湾で受けたインプットをしっかり消化して、自 分たちらしいアウトプットにしていることが何より も大切な一歩目なんだなと痛感するとともに、彼ら のような若手がもっと仲間に増えていくように筆者

▼写真4 台湾×中国×日本でアイデアソン!



たちも動いていこうと鼓舞されています。

筆者自身も台湾がきっかけでCode for Japanのコミュニティマネージャーを拝命し、今後シビックテックをより多くの非エンジニア・あらゆる多様な性の仲間が増えていけるように画策していこうとしている状態です。

来年、一緒に行きませんか?

筆者自身、このサミットがきっかけで、仕事にも Code for Japanの活動にも変化がありました(登壇 者のAudrey さんに話しかけたことから、EDTECH TAIWAN 2018出展が決まりました)。表題「あなたのスキルは社会に役立つ」のヒントがgOv summit にはたくさん詰まっています。その社会は日本かもしれないですし、台湾含めアジア圏、あるいはもっと遠くの国かもしれません。まず一歩踏み出すのに台湾へ行ってみるのはいかがでしょうか。Code for Japan も来年はさらに多くのメンバーが参加すると思うので、ぜひ一緒に来てください(写真5)。気になることがあればSlack きをにていつでもお待ちしています!野

▼写真5 g0v summitに参加したCode for Japanメンバー

